

接触領域としてのアルパカ品質改良

佃 麻 美

1 はじめに

本稿の目的は、中央アンデス高地のアルパカ牧畜において現在進行しているアルパカの品質改良の実践の場を接触領域という観点からとりあげることで、現在の変容が起きている状況は一面的なものではなく、さまざまな要素が絡み合いつつ複雑に生起していることを具体的に明らかにすることである。¹⁾

周知の通り、ペルーはスペイン人征服者によって植民地とされていた。プラット [Pratt 1992] が想定したコンタクト・ゾーン（接触領域）、すなわち、ヨーロッパを中心とする植民地宗主国と非ヨーロッパ地域との接触が起こった地域なのである。しかしながら、その中でも中央アンデス高原は、標高が高く、スペイン人が高所を嫌ったため、「牧民社会は農民社会に比べ、征服以後植民地政府による管理やスペイン人との接触がずっと少なかった。特に、管理強化のため、農民社会がレドゥクション（集落の移動・再編成）の強制を受け、それによって伝統文化の存続に大きな打撃を受けたのに対し、集村を形成しない牧民社会にはほとんど及ばなかったようである。そのため、牧民社会は征服以前からの文化的連続性が強く、伝統をよりよく維持している」[稲村 1995:11] とされ、その伝統的な生業形態に研究の焦点が当てられてきた。

日本で初めて南米における牧畜の重要性を指摘した稲村によると、その概要は以下のようなものである [稲村 1995]。まず、特色としては、①農耕（農民）との緊密な関係、②乳を利用しない、③（半）定住的、という3点がある。生業に欠かせないものとして、アルパカの毛、リヤマの輸送力、そして両者の肉が特に重要である。乳を利用しないため、主食はジャガイモなどの農作物であり、上記のものを利用して農作物を獲得する必要がある。伝統的な方法では、リヤマのキャラバンを編成し、畜産物や他地域の生産物と農作物との物々交換を行う。あるいは、農作物の収穫期に農村へ赴き、リヤマを使役して収穫物を運搬し、報酬としてその一部をもらうというものである。牧民にとってのリヤマの重要性は、「リヤマは私の畑」という言葉に象徴されている [友枝 1986]。輸送手段を持たない農民と、農産物を手に入れた牧民の関係は「互惠的」であるという。このように農作物の獲得は、開かれた市場ではなく、農民と牧民の間の友人関係を通じて行われ、ひとつひとつ確立された関係は折々に強化されながら、父から息子へと受け継がれていく。

一方、アンデス社会へ市場経済が急速に浸透してきていることも早くから指摘されてき

た [Concha Contreras 1975; Custred 1977; 友枝 1986:30-33; 山本 1992:224-228; 稲村1995:99-100]。そこでは国際市場におけるアルパカ毛の高騰から、たくさんアルパカを持っている牧民は大きな現金収入を得て、牧民と農民の関係が希薄化していることが報告されている [Concha Contreras 1975:99-98]。しかしながら、こうした研究が行われた時点（1970年代中葉～80年代末）では、リヤマのキャラバンは相変わらず重要で [Custred 1977:84]、牧民社会の根本的な経済的・社会的変容をもたらすには至っていないとされ、その理由として、農民と牧民が単なる経済的関係ではないことが強調された。しかしその後、市場経済化とグローバリゼーションの中で、地方の道路整備が進み、リヤマを持たずにアルパカだけを飼う牧民が増えてきたことを稲村は指摘している [稲村 2007a:34-36]。これは輸送手段としてのリヤマの必要性が減じ、同時に農民との互恵的関係がくずれてきたことも意味する。人々の間では、多大な出費を強いられるカトリック聖人の祭りが衰退し、コミュニティの結束や相互扶助に代わって資本主義的な価値観や個人主義が浸透し、互酬性や再分配よりも個人や家族の福利を優先する市場交換原理への移行が進んでいるという。また、家族と放牧地の細分化も進んでいる [稲村・山本 2007:565-570]。

近年のアルパカ飼養の変容に関しては、真鍋がグローバリゼーションのもとでのアルパカ毛の生産をめぐる諸問題について報告している [真鍋 2009]。現在、国際市場に流れるペルー産の牧畜製品において最も重要視されているのはアルパカの毛であるが、その小生産者は仲買人に公正な市場価格以下の値で毛を引き渡すことを強いられており、ラクダ科動物の飼育に関わる家族の90%が貧困または最貧困層である。毛が品質ではなく重量によって買い上げられることで、ここ20年間でペルー産のアルパカ毛の品質が悪化したといわれている。このため、アルパカの品質改善（遺伝的改善）と、毛の納入形態や納入方法の改善を課題として挙げ、さまざまな機関が問題の原因究明にむけて取り組みを始めていることが報告されている。

鳥塚は、一つの村に焦点を当て、アンデス牧民社会の近年の変化をミクロな視点から描き出した。リヤマのキャラバンによって農作物を手に入れるという伝統的方法が廃れてしまい、リヤマが手放されていった要因としては、定期市や道路の発達などの外的要因と、共有であった放牧地を村の成員に割り当てた土地区分政策という内的要因が絡み合っている。しかし、それに関する言説は村人によってまちまちであることを指摘したうえで、かれらがアルパカの改良を中心とした新しい社会関係を築くことに努め、リヤメーロ（リヤマを飼う人）からアルパケーロ（アルパカを飼う人）へと自らのアイデンティティを選びなおそうとしていると論じている [鳥塚 2009]。

本稿がとりあげる人々も、リヤマによるキャラバンを既に行っておらず、アルパカの品質改良を積極的に推進している。そこは、従来いわれていた「伝統的な社会」ではなく、国際市場の動きに影響され、「外部」の科学的な知を受け入れている社会である。田中は、人類学者と他者の出会いの場として、すべてのフィールドがコンタクト・ゾーンであり、これを「コンタクト・ゾーン1」と定義した。そして、伝統的に人類学者は、フィールドを相互作用的な力が働くコンタクト・ゾーンとして見なすことを拒否し、自給自足的な世界として描いてきたと批判している。さらに、「ヨーロッパ、すなわち近代に「汚染され

た」世界」を「コンタクト・ゾーン2」として、これを積極的に研究対象にすべきだと主張している [田中 2007:33]。本稿の対象はまさに「コンタクト・ゾーン2」に当たるだろう。品質改良の実践の場では、「町」と「山」、品質改良を推進する技術者の「科学的（畜産学的）な知」と家畜飼養者の「民俗的な知」が接触している。

次章では中央アンデス高地の環境と南米ラクダ科動物について概観したうえで、調査地となる「町」と「山」について記述する。第3章では「山」における「科学的な知」と「民俗的な知」の接触を、品質改良において重要な生殖管理の方法に焦点を当てながら見ていきたい。改良を進めている2家族を比較すると、その実践には差異が見られ、そこには改良方法を学んだ経緯や現在の状況が影響し、さらに技法や言説も取舍選択されていることが明らかとなる。第4章では、「町」における家畜品評会と家畜取引について記述する。家畜品評会は品質改良を進めるアルパカ飼養者が集まる場であり、畜産学の専門家だけではなく、飼養者同士の接触もまた重要であると考えられる。そして、ここでは技術者から「科学的な知」が飼養者へもたらされるだけではなく、飼養者から実際に品質改良が進んだ優良な家畜が技術者へもたらされるという状況が見られる。第5章では、接触領域の中で生じる自己意識の変化について論じ、第6章で結論をまとめることにする。

2 中央アンデス高地とラクダ科家畜

2-1 中央アンデス高地の環境

本稿が対象とした調査地は、南米の中央アンデス高地に位置する。アンデス山脈は長さ8,000kmともいわれる地球上で最長の大山脈であり、また赤道を越えて南北に走っていることにその特徴がある。このため、緯度によって環境が大きく変わり、一般に北部アンデス、中央アンデス、南部アンデスの3地域に大きく分けられる。北部アンデスの大部分は赤道以北にあり、国でいうとベネズエラ、コロンビア、エクアドルを走る。中央アンデスは、ペルーおよびボリビアを走る山岳地域のことで、それより南のチリとアルゼンチンの国境を走る山脈が南部アンデスである [山本 2007:3]。

中央アンデスは東斜面が湿潤、西斜面が乾燥気候で、その特徴的な自然環境がプナと呼ばれる寒冷な草地帯である。地形的にも傾斜が緩やかな丘陵または高原地帯で、アルパカ飼養も主にここで行われる。緯度が低いため、気候は比較的温暖で、気温は日中が高温、夜間は低温というふうに、日変化は大きいが年変化が小さい。雨がよく降る雨季とほとんど降らない乾季に分かれており、4月半ば頃から10月半ば頃までは雨量が乏しいが、10月後半から4月中旬まではよく雨が降る。中央アンデスでは農耕限界が標高4,300mに達し、アルパカやリャマの放牧の上限は標高5,000m近くまで達する。

2-2 南米ラクダ科動物

南米ラクダ科動物には4種類ある。そのうちリャマとアルパカが家畜化されており、ビクーニャとグアナコが野生である。本稿で特にとりあげるのはアルパカである。アルパカは荷駄用として利用されるリャマより小型で、体長は150~175cm、体高は80~90cmで



写真1 アルパカ、ワカヤ、有色

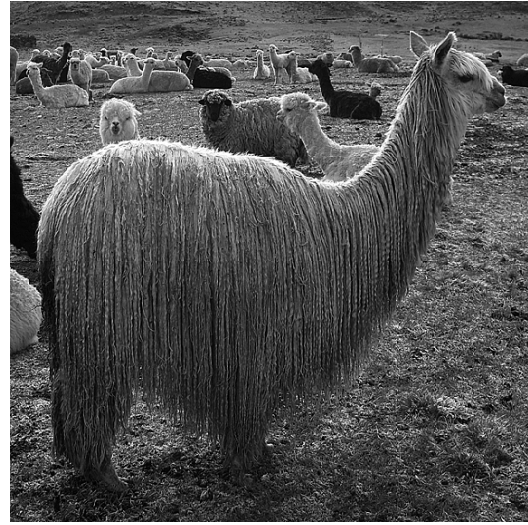


写真2 アルパカ、スリ、白色

ある。食肉としても利用されるが、その重要性は何よりも強靱性、保温性が高く、肌触りの優れた良質の毛を供給することにある。リヤマが比較的乾燥した土地に適しているのに対し、アルパカは湿地を好み、より高地に適応しているため、分布域がより限られる。ペルーに約300万頭、ボリビアに30万頭、チリとアルゼンチンではわずかしこ飼育されていない。ラクダ科家畜は、ヨーロッパからヒツジ、ヤギなどが導入されると、急激にその分布域と数を減じ、現在は高原のみに限定されるようになった〔稲村 1995:198〕。アルパカはワカヤとスリに品種が分かれている（写真1，2）。スリのほうが長毛で、ワカヤはこれより毛が短い。織物繊維としてはワカヤの毛が優れており、商品価値が高い〔山崎 1992a:353²⁾〕。毛の色は、白一色のものが白色（blanco）、それ以外の色（地が白色に斑を持つアルパカも含む）はすべて有色（color）と呼ばれる。

雨季はリヤマやアルパカの出産期に当たり、比較的暖かいこの時期に毛刈りも行われる。乾季のはじめの4～6月は、ジャガイモやトウモロコシの収穫期に当たるため、この時期以後、牧民はリヤマのキャラバンによって農作物獲得の旅を行っていた〔稲村 1995:70-71〕。

2-3 調査地——「山」と「町」

本稿では、実際にアルパカなどの家畜を飼養する場、つまり放牧地のある標高4,700m前後の場を「山」、標高がおおよそ3,500mと比較的低く、家畜取引などの拠点となっている場を「町」と呼び、これらに対比させながら分析を進める（図1）。

「山」とは、ペルー共和国クスコ県カンチス郡ピトマルカ行政区ピナイア村を指す。その中心村落は標高約4,700mで、「町」から1日1往復トラックが出ている。道は未舗装で、片道4～5時間程かかる。中心村落には、200人程度が住み、全員が牧畜に携わっていると、ここの住人は話す。小学校、集会所、売店と食堂が数軒、小さな病院がある。水道、ガス、電気は、中心村落においては公共施設などに部分的に導入されているが、そこから離れるとまだどれも整備されていない。



図1 ペルーの地図

「町」とは、同郡シクアニ行政区を指す。シクアニは、1920年代に道路網が整備され、1940年代から60年代にかけてトラック輸送が発達し、低コストでの輸送が可能になった。現在でも獣毛の集積地として重要な役割を果たしている〔鳥塚 2009:13〕。市場や学校、銀行、レストラン、商店など、一通りの設備がそろっており、クスコやプーノ、アレキパ、フリアカなど近隣の各都市に、1日何便もバスが出ている。

家畜、特により高地に適しているアルパカの飼養には、標高が高く、一定程度の広さを持った「山」の放牧地が不可欠である。しかし、インフラストラクチャーの整備が不十分のため不便であり、またリヤマのキャラバンによる農作物獲得を現在は行っていない人々が、主食となる農作物を購入するために市場とのアクセスが必要となる。このようなニーズを満たしてくれるのが「町」である。より高い教育を受けさせるために、「町」の学校へと子どもを通わせる人々もいる。さらに、「町」は新たな情報の出入り口でもある。「山」、つまりピナイア村には、アルパカの品質改良を推進する行政機関が入っているが、品質改良のための知識を持った行政機関の技術者は「町」から「山」に派遣されてくる。それだけではなく、本稿でとりあげる人々の「町」での活動は、アルパカ飼養から分離・独立しているわけではない。すなわち「町」で行われる家畜品評会や家畜売買は、かれらを選びとっている生計戦略を有効に駆動させ続けるために必要であり、これらもまた一つの接触領域であるのだ。以下にそれを見ていく。

3 「山」という接触領域

まず、「山」という接触領域について見ていこう。「山」におけるアルパカ飼養の中でも、品質改良するに当たって最も重要な実践の一つである生殖管理に注目する。この実践は「科学的（畜産学的）な知」と「民俗的な知」が接触する場である。「町」から「山」へ「科学的な知」を持ち込む品質改良を推進する行政機関、それにならって積極的に品質改良に取り組んでいる CV 家、それとはやや異なる方法で品質改良に取り組む RO 家を順に

見ていく。

3-1 「町」から持ち込まれる「科学的な知」

前述のとおり、ピナイア村ではアルパカの品質改良が推進されており、繁殖用家畜生産センター（Centro de Producción de Reproductores, 以下 C. P. R. と記す）という行政組織が指導を行っている。この組織は、ピトマルカ地方自治体（municipalidad de Pito-marca）とクスコ地方行政（Gobierno Regional Cusco）の2つが運営している。C. P. R. はピナイアだけではなく、近隣の地方にいくつか設置されており、その技術者は「町」から派遣されて、週ごとにそれらの地方を回っている。活動としては、アルパカ飼養のための講習会、優良なオスの分配、人工授精の推進などがある。

より直接的に生殖管理に関わるのは、優良なオスの分配と人工授精である。優良なオスの分配とは、組織が管理する優良な種オスを貸し出して交配させ、遺伝的な改良を目指す取り組みである。2010年3月現在、C. P. R. は53頭のオスを管理しており、11月にオスを各家に1頭ずつ貸し出し、12月～翌3月まで交尾をさせる。1頭のオスにつき20頭前後のメスが交尾可能だという。その後、貸し出されたオスと、そのオスを親とする仔のうちの1頭をC. P. R. に返却する。このC. P. R. が管理するオス群は、ピナイア村だけでなく、年ごとに他にもC. P. R. がある別の地方を回っていくという。

もう一つの遺伝的改良の手段である人工授精については、2010年3月4日～10日にかけて、どのような実践をしているかを観察することができた。以下にその内容を示す。

① メスの選別（3月4, 5, 9日）

人工授精のためのメスを選別する。メスを囲いに入れて、発情しているかどうか、病気になっていないかどうか（きれい limpio か、汚い sucio か）を確認する。この順番は前後することもある。発情しているかどうかは以下のようにして確認する。まず、交尾させるメスを囲いに集める。そして、その中に発情したオスを1頭入れてメスにけしかける。オスは、「グォーグォー」という大きな鳴き声を上げながら、あたりかまわずメスを追い回す。そして、オスはメスの後ろから乗りかかり、メスを座るように促す。このときのオスの体の大きさと押さえ込む力が重要な要素となっており、その力が強くないとメスは受け入れないといわれているが[本江・藤倉 2007:320]、この場合はメスが座り込むかどうかでメスが発情しているかを判断している。メスが座り込むと発情していると判断され、オスはすぐさま引き離されて、別の囲いにひとまとまりにされる。また、逃げ回って座り込まないメスは発情していないので、発情しているメスとは別の囲いに分離される。病気かどうかは、捕まえたメスの膣の中に管を入れて中を見て、何も汚れていなければ limpio としてホルモン剤が注射される。汚れていれば sucio だとして抗生物質が注射され、人工授精の対象からははずされる。日と場所を変え、6頭、15頭、15頭、11頭、5頭が検査された。

② オスの選別（3月4日）

人工授精のためのオスを選別する。囲いに入れたオスのうち、何頭かを捕まえてビタミ

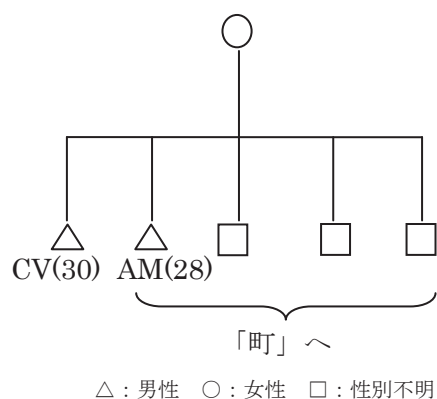


図2 CV家

ン剤を注射する。

以上の作業は、C. P. R. の技術者 (técnico) と獣医 (veterinario) の2人が派遣されてきて、人工授精に参加する家族と協力しながら行われる。

③人工授精 (3月10日)

人工授精は早朝6時頃から始まる。C. P. R. からいつもより多くの人々が派遣されてくる。「町」から運んできた顕微鏡と発電機を車に積み、中心村落から少し離れた囲いに行く。まず、オスとメスを交尾させる。交尾が終わるとメスの膣に試験

管を入れ、メスの頭の方を持ち上げて、体を揺すって試験管の中に精液を落とし込む。5頭のオスから精液を集めた。次に精子がちゃんと含まれているかどうかを顕微鏡で確認したのち、その精液をあらかじめ選別したメスに注入し受精させる。受精直前にも limpio か sucio かが確認される。人工授精は2ヶ所で行われ、1ヶ所目では9頭中6頭、2ヶ所目では26頭中23頭が人工授精した。

精液を集めるさい、顕微鏡で確認してもうまく精子が見つからず、やり直すという場面が見られた。かれらによると、今年の人工授精は例年よりも時期が遅く、そのためオスが持っている精液の量が少ないのだという。人工授精は、途中で食事などをはさみながら正午過ぎまで続いた。

人工授精には、6家族が参加していた。ピナイア村にはおよそ130家族が居住し、その住人はもっぱら牧畜に従事しているという報告があり [Sendón 2009]、この参加家族数の少なさから考えても、村のすべての人が参加しているとは考えられない。これはオスの分配に関しても同様である。後述する CV 家は人工授精にもオスの分配にも参加しているが、RO 家はどちらにも参加していない。この他、C. P. R. が村で行ったアルパカ飼養の講習会においても、CV は会場設営などを率先して行い、まめまめしく立ち働いていた。これらのことから、CV 家の生殖管理の方法は、組織が推奨している方法や言説にある程度忠実であると考えられる。それはいかなるものかを見たい。

3-2 「科学的な知」と「民俗的な知」—— CV 家の品質改良

CV 家 (図2) は、CV とその母がピナイア村の中心部に家を持ち、CV の母が食堂兼売店をそこで営んでいる。CV の兄弟は、「町」へ出てしまっているので、CV が兄弟全員の家畜の全体的な管理をしている。アルパカのメスを200頭、140頭、150頭の3群、オス³⁾63頭の1群、全部で4群に分け、村からは少し離れた放牧地で各群を飼養している。それ⁴⁾ぞれの群には雇った牧夫が1家族ずつついて、普段の放牧を任されている。若干のリヤマを飼養しているが、既にリヤマのキャラバンは行っていない。

CV の交尾のさせ方は、人工授精のときと同様に、発情したメスを選別することから始まる。そして、選別後に、今度は細かく区切られた囲いの中にメスを1頭ずつ入れて、そ

ここに品種（ワカヤ・スリ）と色（白色・有色）を合致させたオスをやはり1頭ずつ入れて交尾させる。交尾を始めると必ず人が介助して、ちゃんとペニスが挿入されているのを確認する。そして、交尾をしている個体のアレテ（耳に付けた番号標）の番号をメモして、のちに生まれてきた仔がどのオスとメスをかけ合わせたものか確認できるようにしていた。本江・藤倉は、南米ラクダ科動物の交尾は5～50分続き、平均すると20～30分、長いときには1時間以上交尾を続けることがあると報告している。また10分以上の交尾の刺激がないとメスは排卵しないので、これ以上の交尾の時間が必要であり、10分以上継続し、この1回のみの交尾の場合、平均妊娠率は70%だという[本江・藤倉 2007:321]。しかし、CVの場合、20分を過ぎてもアルパカが交尾を続けていると、「長すぎる」のか、引き離して、囲いからオスを追い出してしまっていた。

CVは自身の生殖管理に自信を持っているようで、筆者に対して自分のやり方は「より実利的だ（más practico）」と自慢していた。しかし、このようにC. P. R.の推奨する方法や言説にしたがっていると考えられる中でも、CVは「午後に仔が生まれると寒くて死にやすいため、午前に生まれる方が良い。午前に交尾をすると午前生まれ、午後にする

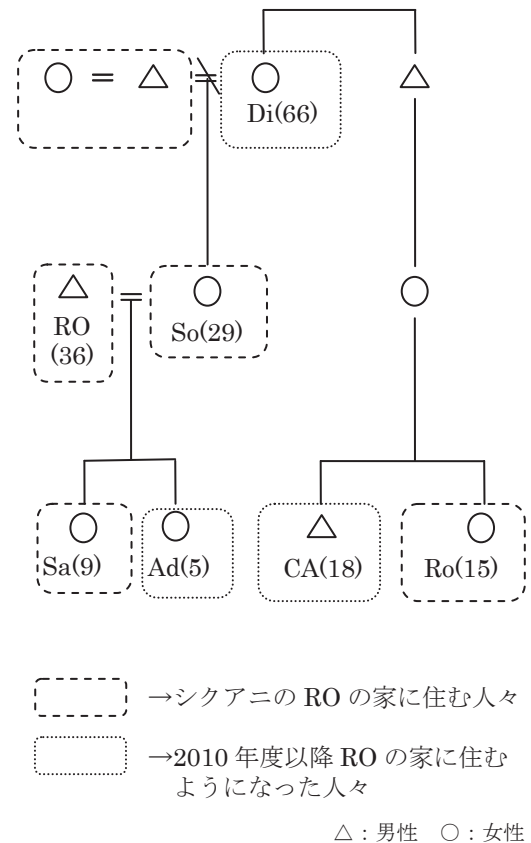


図3 RO家

3-3 「町」と「山」を行き来する

次に、RO家（図3）について見てみよう。RO家は、ピナイア村の中に放牧地を私有しているが、この放牧地、つまり「山」に住んでいるのは家族の一部である。当初、ROの妻Soの母であるDi、その孫のAd、さらに親戚のCAが放牧地に住み、他には雇われ牧夫であるAR・Je夫妻が日常的な家畜の世話を担っていた（図4）。RO・So夫妻は普段は「町」のシクアニにある一軒家に住み、家畜の取引を引き受けている。また、後述するフェリアと呼ばれる家畜品評会への出場も夫妻が取り仕切っている。フェリアはRO家が品質改良の手段を学ぶための情報源でもある。RO・So夫妻が放牧地を訪れるのは、フェリアの準備や毛刈り、病気の治療など、人手が必要なときだけである。

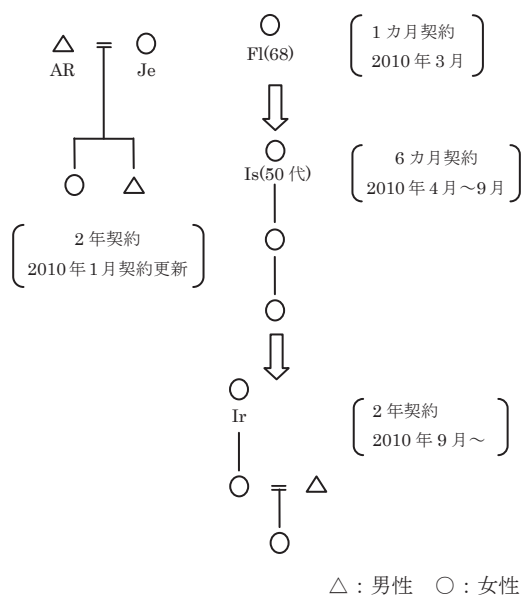


図4 雇われ牧夫

RO家は、アルパカのメスを330頭、オスを78頭飼養しているが、重要度の下がったリヤマは既に飼養していない。当然のことながら、伝統的な農作物獲得方法であるリヤマのキャラバンも、CV同様、既に行っていない。それゆえ、主食となるジャガイモなどの農作物について、Soは「私たちはより現代的（más moderno）だから、すべてのものをシクアニから車で運ぶ。リヤマもウマも使わない」と言う。この「より現代的」という言葉は、この場面に限らず、ROとSoが自身の先進性を誇るときによく聞かれる言葉であった。

「町」で1年のほとんどを暮らすRO・So夫妻に代わって「山」での家畜飼養に

大きな役割を果たしているのが、雇われ牧夫の存在である。筆者の調査中には、RO家の人々が実際の家畜飼養を離れていき、代わりに雇われ牧夫へとその役割を任せていく様子が見られた。放牧地では、当初、普段の放牧を行っているのは、Di、Diの兄の孫CA、それに加えて雇われ牧夫のAR・Je夫妻であった。しかし、CAは、学校に通うために4月4日にシクアニへ向かった。CAは、放牧に行くときもリュックの中に学校の教科書を入れて持って行き、放牧中の暇な時間にそれを読むという勉強熱心さであった。筆者には、システム・エンジニアリングの勉強がしたいと前々から語っていた。CAの代わりとして、3月29日に、最初の雇われ牧夫FIがやってきた。しかし、彼女は1ヶ月の短期契約で、4月12日には、さらにその後任としてIs母娘が自身の家畜を連れて放牧地を訪れた。彼女たちは6ヶ月契約で、9月8日に去っていった。さらに9月23日にはIrがやってきた。彼女は2年という比較的長期の契約を結んだ。そして、これを機にDiはシクアニへ下りてくることになった。しばらく前からDiは「もう放牧はしたくない」ともらしていたのである。放牧地に住む牧夫は短期間のうちに次々と代わり、最終的にはRO家の関係者で恒常的に放牧地に住む人はいなくなるに至った。

では、この雇われ牧夫とは、いかなる人々なのだろうか。かれらは土地を所有していないが家畜を所有している人たちである。FIは自身の家畜を連れてこなかったが、AR・Je夫妻も、Is母娘もIrも60頭前後のアルパカと少数のウマ、リヤマ、ヒツジなどを飼養しており、放牧地でRO家の家畜とともに世話をしている。こうすることで、雇われ牧夫は土地を賃借することなく、自身の家畜に牧草を食べさせることができる。雇い主にしても、土地を使わせてあげることで、給与を支払わずにすむのである。

AR・Je夫妻は、2010年1月に2年契約を更新した。比較的長らく雇われているかれらも、前回の契約を結ぶ前には、ピナイア村の別の人に雇われていた。2012年の1月にかれらが望めばまた契約更新はなされるが、そうでなければ出て行くだろうとSoは淡々と

った。「来て、去って、来て、去って…」土地を所有しない牧夫は、転々と移動しながら放牧を続けているのである。そして、このような雇われ牧夫の存在こそが、RO・So 夫妻が「町」に拠点を持つこと、「町」と「山」を行き来しながら家畜飼養を営み続けることを可能にしているのである。

3-4 接触領域の新たな形成—— RO 家の品質改良

RO 家と CV 家とでは、生殖管理の方法に差異が見られる。まず、RO 家では品質改良のためにアルパカの群れの構成が従来とは変化している。群れの構成の仕方について、稲村は、①アルパカの雌とその仔と若干の種雄、②アルパカの雄、③リヤマの雌とその仔と若干の種雄、④リヤマの雌、であると報告している [稲村 1995:81]。品質改良を始める前には、RO 家でも、このようにオスとメスを分けるだけであったという。しかし、現在では、アルパカの品質改良を進めるために、品種（ワカヤとスリ）と色が交配によって混ざることがないように分けて放牧するなど、新しい放牧の方法が導入されていることが報告されており [鳥塚 2009:11]、RO・So 夫妻への聞き取りからも、これとよく合致した群れの分け方が聞かれた。すなわち、1～3 月の間、つまり交尾期においては、

- ① ワカヤ 白色 ♀
- ② ワカヤ 有色 ♀
- ③ スリ 白色 ♀
- ④ スリ 有色 ♀
- ⑤ ♂（すべての品種、色を含む）

という 5 グループに分けられており、それ以外の 4～12 月には、

- ① ♀（すべての品種、色を含む）
- ② ♂（同上）

という 2 グループになるという話しであった。しかし、実際に筆者が観察したところ、交尾期には、

- ① ワカヤ 白色・有色 ♀ + 繁殖用♂
- ② スリ 白色・有色 ♀ + 繁殖用♂
- ③ 残りの♂

という 3 グループであった。⁸⁾

このように交尾期における群れの構成が、聞き取りと実際に異なっているのは、ひとえに人手の問題だと思われる。RO・So 夫妻が 1 年のほとんどを町で住むという状況にあっても、1 グループに 1 人ずつ、合計 5 人の人手を確保することは、牧夫を雇ったとしても難しいと考えられる。筆者に語った「5 つのグループに分ける」という言葉は、「こうできたらいいな」という願望を示すものだと推測でき、実際の場合では、その都度の制約により変化をしているのである。

RO 家では交尾期、上記のようにアルパカの群れを品種によって分けると、そのワカヤとスリのメス群の中に、それぞれ優良なオスの個体を 2、3 頭混ぜることで交尾をさせる。もちろん、ワカヤ、スリという品種はそろえる。しかしながら、生まれてきた仔を見ると、

なぜかワカヤからスリの仔が生まれていることがある。これについて質問すると、交尾期に分離してあるはずのオスが逃げ出し、メスと勝手に交尾したためであるという。⁹⁾ 実際、筆者の調査中にも、放牧が終わった後、メス群に混ざる予定のないオスが勝手に柵を越えてメス群に混ざっていることがあり、そのオスを必死でもとのオス群に戻そうとしている光景が一度ならず見られた。交尾は、放牧中にはあまり見られず、放牧前の早朝、あるいは放牧後の夕方、敷地内に戻ってきてから、交尾をしているオスに特有な「グォーグォー」という鳴き声が聞こえていた。

RO は、「CV は1頭のオスに1頭のメスをあてがうが、自分は優良なオス1頭に対してたくさんのメスと交尾させる」と、自身のやり方がCVとは異なっていることをはっきりと認識していた。また、RO は、C. P. R. が指導する優良なオスの分配や人工授精といった活動にも参加していない。なぜ今のような方法をとるのか、またオスの分配や人工授精に参加しないのはなぜかと聞いたところ、「自然に交尾をさせた方が強い仔が生まれるから」「C. P. R. には良いオスがいないから」と答えた。そのうえで筆者に対して「CVのところには、良いアルパカがたくさんいたか？」と、近隣の人がどのようなアルパカを所有しているのか気にかけている様子が見られた。

人工授精、CV 家、RO 家の生殖管理の方法を見ると、品質改良のために肝要な点は、品種と色をそろえて優良なオスとメスをかけ合わせるということであるとわかる。その点では3者は共通しているが、さらにミクロに見れば、差異がある。このことは、CV 家が現在進行形で C. P. R. から改良の方法を学んでいるのに対して、RO 家は学んだ時期と相手が異なっていることにも関係していると考えられる。

RO 家で、積極的に品質改良に取り組んでいる中心的な人物は RO であるが、ピナイア村の放牧地は Di・So 母娘の所有地であり、RO は隣村からのいわば入り婿である。1994年に、RO の実家がある隣村を、畜産学の技術者が訪れ、現在のピナイア村で C. P. R. が指導をしているのと同様に、品質改良の方法を人々に教えたのだという。RO とその両親は、品質改良に興味を持ち、実際に取り組み始めた。¹⁰⁾ そして、So との結婚後、2002年から、ピナイア村の放牧地でも品質改良を始めたというのだ。RO の実家よりピナイア村の方が水場に恵まれており、品質改良にはより適している。¹¹⁾ そうして、RO 家は CV 家よりも先駆けて品質改良を進めてきたのだと思われる。

つまり、RO にとって、「科学的な知」との最初の接触は1994年にさかのぼることになる。そして興味深いのは、RO が So と結婚し、Di・So 母娘のもとに品質改良の知識を持ち込むことによって、さらなる接触領域が形成されていることである。品質改良という点で一步 CV 家の先を行く RO 家は、CV 家の未来の姿なのかもしれない。CV 家のみならず、現在、品質改良について学んでいる人々が他の人々にその知識を伝えることによって、アルパカ飼養者自身が接触領域をどんどん新たに形成していく可能性がある。

4 「町」という接触領域

前章では「山」での接触領域を見てきたが、「町」と「山」を行き来する RO 家を詳し

く見ていくと、「町」にも接触領域があることがわかる。本章では、RO 家に焦点を当て、「町」という接触領域ではどのようなことが起こっているかを明らかにする。

4-1 家畜品評会フェリア

RO は、技術者から品質改良を学んだ後、フェリアと呼ばれる家畜品評会でも品質改良を学んだという。それだけではなく、フェリアは RO 家の家畜の取引にまで関わってくる。先に結論を言ってしまうと、RO 家は、毛を売ることも、繁殖用として生体個体を取引することで大きな利益を上げることを目指しており、フェリアがそのために一役買っているのである。

フェリアは、多くは祝祭イベントの一つとして行われる。ラクダ科家畜だけではなく、ウシ、ヒツジ、クイ（テンジクネズミ）の品評会が催され、規模の大きなものではチーズやヨーグルトなどの畜産物、織物や革製品などの工芸品、農作物に関しても品評が行われることがある [鳥塚 2010:99]。フェリアはさまざまな場所と規模で開催され、RO 家は毎年、複数のフェリアに参加している。2010年には6つのフェリアに参加した。

フェリアへの参加は以下のような流れになる。まず、フェリアに出る準備のために、RO・So 夫妻は手伝いとして雇った若者を連れて放牧地を訪れ、アルパカの外見を数日ばかりで美しく整える。「町」から放牧地に行くためには、トラック運転手である友人に車を出してもらう必要があり、これはフェリア会場までアルパカを輸送する場合においても同様である。フェリア当日でも、手伝いとして若者の手助けが必要であり、彼らの食・住は RO・So 夫妻が提供する。また、品評会に出場するときには、他の家族と合同してチームを組む。アルパカは、品種（ワカヤ・スリ）、色（白色・有色）、性、年齢（歯から判断され4カテゴリーに分けられる）によって32カテゴリーに分けられ、そのカテゴリーごとに品評が行われる。フェリアは、家畜の改良の進捗度をはかる場として機能しているという [鳥塚 2010:99]。また、大勢の人が家畜を持ち寄るフェリアにおいて、RO と So は「良い」家畜を見ることで品質改良を学んだのだという。家畜の品質改良は良いオスと良いメスを交配させることによって達成されるが、どのようなアルパカが「良い」のかを知らなければそれも不可能だからである。すなわち、フェリアは、RO や So にとって、どのようなアルパカが評価されるのか、市場的な価値を自分の目で見て学ぶ場であったのである。

現在、アルパカの品質改良が進んでいる RO 家は、各カテゴリーで優秀な成績をおさめることはもちろん、総合的に優勝することを目指している。そのためには1チームからたくさんアルパカを出し、それぞれのカテゴリーで優秀な成績をおさめるほうが有利なので、RO 家は別の家族とチームを組んで出場をしている。また、親戚や知り合いから良いアルパカを借りたり買ったりすることもある。2010年8月12日～16日に行われたシクアニのフェリアにおいては、RO 家は、自身の所有しているアルパカだけではなく、CV 家のアルパカを7頭借り受けて出場していた¹²⁾。これは、いくつかのカテゴリーのアルパカを RO 家が所有しておらず、その穴を埋めるためである。総合的に優秀な成績をおさめることができれば、バイクなどの賞品を得ることができ、これを売り払えば雇った若者への給

金や食事代、アルパカの輸送代やえさ代など、フェアでの経費をまかなうことが可能であるが、受賞できなければ純粋な出費となってしまう。

4-2 家畜取引

このようにフェアに参加するためには、さらにそこで優秀な成績をおさめるためには、多くの人手が必要で、金銭的な負担も少なくない。現在でも多大な労力を払ってフェアに参加する理由をROは、①アルパカを売るため、②名声を得るため、というふうに説明した。ここでいう売るアルパカとは、繁殖用としての生体個体である。

直接的には、フェア会場でアルパカを売買することができる。人々は品評会に出す以外にも売却用のアルパカを連れていっており、品評を行っていないときには、随時人々が家畜囲いを訪れて、自身の必要としているアルパカを物色している様子が見られた。品評会に出場せずに、売却用のアルパカだけを連れてきている人もいる。しかし、それ以上にRO家にとって重要なのは、総合的に優秀な成績をおさめることで、自身のところには優良なアルパカがいることを周りに知らせめることである。いかに良いアルパカを持っているようとも、フェアに参加しなければ誰も自分たちが良いアルパカを持っていることを知らず、買う人もいないというのがSoの主張である。So曰く、

(質の良くないアルパカは) 140ソレス¹³⁾か150ソレス程度にしかない。しかし、良い繁殖用のアルパカは800ソレスとか1,500ソレスにもなる。値が全く異なっている。私たちは考えて、良いアルパカを育て、毛に対してはあまりこだわらないようにした。私たちにとってより重要なのは、繁殖用のアルパカである。普通(毛刈りをする)なら1頭30ソレスのところが、良いアルパカを育てれば、1頭が1,000ソレスになる。隣家の人や他の人は、毛だけ売ることをまだ続けている。なのであまりお金を持っていない。

実際、シクアニで開催されたフェアでは、メス1頭が1,800ソレス、オス2頭が各1,500ソレス、オス2頭が各1,800ソレス、オス1頭が3,200ソレスで売れた。最後の1頭の値がとりわけ高いのは、これが特に優良なアルパカだからである。他は、フェアに出場させられるほど優良ではなく、品質的には一段劣る。RO・So夫妻は、これを「普通の(regular)」アルパカと呼んでいたが、未だに品質改良がそれほど進んでいない人々にとっては、十分に良質なものであると考えられる。この売買では、オス2頭を各1,500ソレスで売った相手はC. P. R.である。それ以外は、個人生産者に売られた。

また、それ以外にもRO家は、インターネットによる競売を通して、大規模な売買を行っている。地方自治体から、何頭の何の家畜が必要かがインターネット上に告知され、それに入札を行う。そして、一番安い額を入札した人が家畜を売ることができ、実際にその地方自治体まで家畜を運んで売るというものである。そして、家畜を購入した自治体は、村へとその家畜を贈る。こうして地方自治体から村への支援が行われているのである。2011年11月には、ROはある地方自治体に32頭のメスと10頭のオスを34,480ソレスで売却

した。1頭当たりの金額はおよそ820ソレスである。このうち、7頭のメスは知人から300ソレスで購入したものの転売である。また同年12月には、164頭のメスを138,000ソレス、1頭当たりおよそ840ソレスで売却した。この場合は全頭転売で、個人生産者から54頭、企業から110頭、1頭当たり450ソレスで購入したものだという。

以上のように、生体個体といっても1頭当たりの値段の差がかなりあることがわかる。これは、800ソレス前後のものは、アルパカ飼養がまだあまり盛んではない地域に、新たにアルパカを導入するという意味合いが強いからだという。ROはこれを「入植 (repoblamiento)」と呼んでいた。本格的な「改良 (mejoramiento)」のためのアルパカには2,000～3,000ソレス以上の値が付き、上述のC. P. R.へ売ったアルパカなどは、改良と入植の「中間 (medio)」であるという。

4-3 交錯する関わり

フェリアは、畜産学の専門家や技術者が改良の進捗具合を品評する場であり、同時に、同じく家畜の品質改良を進める人々が多く集まる場所である。ここでROたちは、自分たちよりも改良を進めている人の家畜を見て、いかなる家畜が市場価値を持つのかを、自身の目で見て学んだ。現在ではフェリアで優勝するために、別の家族とチームを組んで出場し、さらに必要とあらばCV家など知人から比較的優良なアルパカを借り受け、できるだけ品評を有利に進めるための戦略もとる。そして、以前は改良するための知識を受容していたROたちが、今や、品質改良を推進する行政機関、地方自治体などに、繁殖用の生体個体を供給するという状況にまで至っている。C. P. R.に売却した繁殖用のオスが、ROたちにとっては、「普通 (regular)」と「改良 (mejoramiento)」の「中間 (medio)」のアルパカだったのだとすれば、ROが「C. P. R.には良いオスがない」と言うのにもうなずける。

このようにRO家は、「町」でもフェリアを通して品質改良について学び、自身とは異なる考え方や方法をとるCV家なども含めてアルパカ飼養者同士との関係を深めている。また、品質改良を推進する個人のみならず、組織や地方自治体に繁殖用家畜を売買し、その生計を成り立たせている。農民と農作物をやり取りしていた時代や、毛を売るために仲買人や直接企業と取引をしていた時代よりも、アルパカ飼養者同士のつながりは密接になっているといえるのではないだろうか。繁殖用の生体個体は、アルパカ飼養者同士で売買するものだからである。フェリアでの協力関係も加え、かれらの関係は、内部へと収束し、その密度と広がりを増大させているのである。

5 アルパカ飼いと牧夫

ROやSoは自身のことを「アルパケーロ (alpaquero: アルパカを飼う人)」と自称する。しかし、この呼称が一般的に用いられるようになったのは、あまり古くないと鳥塚は報告している。彼女の調査地では、牧民がリヤマとともに農作物獲得の旅をしていた頃には、リヤマのことを知り、リヤマを飾り、リヤマを食べるという理由で、周辺の人から

「リャメーロ (llamero: リャマを飼う人)」と呼称されていた。アルパケーロという呼称については「アルパカをたくさん飼っていた人たちを仲間がそのように呼んでいたことはあるが、広く使われていたわけではなく、改良種の広がりとの関係があるかもしれないと、友枝啓泰先生から御教示いただいた」[鳥塚 2009:22] とも述べている。しかし、現在、人々は自らを「アルパケーロ」と称し、集会などでも戦略的に用いているという。これらのことから鳥塚は、リャマを売り払ってアルパカを改良することに専念する人々は、潜在的アイデンティティとも呼びうる「リャメーロ」から脱却し、主体的／戦略的に「アルパケーロ」というアイデンティティを選びとっていきこうとしており、そのことを通じて新たな牧民社会の意義を見出そうとしていると結論づけている [鳥塚 2009:19]。

RO・So 夫妻にも非常に強いアルパケーロとしての自負がうかがえた。普段はアルパカの世話をしないと言う So に、筆者が思わず「では、あなたたちはアルパケーロではないのですか？」と尋ねたことがあった。すると彼女は、「私たちはアルパケーロだ。祖母も、母も、私も。私はとても小さい頃から放牧をしながら育った。学校のために町に下りたが、その前は放牧地に住んでいた」と答えた。RO・So 夫妻はまた、自身の娘たちも、自分たちと同じように、小学校に上がる前は放牧地に住まわせている。

一方で、普段のアルパカの世話を担っていた母親の Di からは全く逆の言葉が聞かれた。筆者は Di に「何を調べているのか？」という質問をされ、「アルパケーロの生活について知りたい」と答え、「私はアルパケーロではない。もう放牧はしたくない。アルパケーロを見たいというならば他の人たちの方が相応しい」と言って、筆者を困惑させた。そして彼女がアルパケーロとして名前を挙げたのは、近隣でアルパカを飼っている他の人たちであり、その人たちは雇われ牧夫か、あるいは自身でアルパカを世話しており、町には家を持っていないような人々であった。

母娘でこのように自己意識に差異があるのは、アルパケーロに対して、それぞれが持つイメージが異なっているからではないかと思われた。つまり、Di にとっては、娘を学校に行かせ、自身で土地を持ち、牧夫を雇っている自分は、近隣の土地を持たない、あるいは土地を持っていても牧夫を雇うこともできず、自らあくせく放牧をしているような貧しいアルパカ飼い＝アルパケーロとは違っているのだ、という意識があるのではないだろうか。逆に、So にとっては、フェリアでも優勝候補となるような優良なアルパカを持っている自分たちは素晴らしいアルパカ飼い＝アルパケーロなのであり、自身の持つアルパカを宣伝し売り出すためにも、鳥塚の言うように戦略的にアルパケーロという自己表象を構築していると考えられるのである。またこれは、家畜飼養の最も厳しい部分である、日常的な家畜の世話から一歩身を引くことで、誇らしい部分のみを語ることができるようになっているのではないだろうか。

さらに、RO・So 夫妻は「アルパケーロ」とであると自称するが、雇った牧夫については「パストール (pastor)」という語を使う。従来、日本のアンデス研究では、農民に対する牧民としてパストールという言葉は使われてきた [友枝 1986:38; 稲村 1995:96-113]。しかし、RO たちの言う「パストール」は、「牧民」一般というよりも、むしろ雇われた「牧夫」を指しているように思われる。研究上の農民と牧民という対比からすれば、今で

も RO・So 夫妻を含めて「パストール（牧民）」なのかもしれないが、かれらは、牧民の中で「アルパケーロ（アルパカ飼い）」と「パストール（牧夫）」とを差異化しようとしているのではないだろうか。また、そうだとすると、このパストールこそ Di がイメージしているアルパケーロと重なってくるように思われる。農民との関係、外部との関係が大きく変化していく中で、言葉の意味合いが変わりつつあることが考えられる。そして、RO にしても CV にしても、品質改良に取り組み、アルパケーロとして強い自負を持つかれらはアンデス牧民社会に発生しつつある「新興エリート層」を代表しているのかもしれない。

6 おわりに

以上、アンデス牧民社会における接触領域を見てきた。国際市場でアルパカ毛が高騰し、そこから派生して品質改良が推進されている。品質改良は市場からの要求でもあるし、大多数が貧困層とされるラクダ科家畜飼養者の生活水準を向上させようという政策でもある。

C. P. R. の技術者が「町」から「山」へ赴き、品質改良を普及させようとする様子を見ると、その方向は一方的に見える。しかし、実際には、遺伝的改良にとって重要な生殖管理において、「科学的な知」である技法や言説が、有力なアルパカ飼いの間では選択的に取り入れられており、「民俗的な知」も切り捨てられるわけではなく混在している。また、特に RO 家の場合、「町」と「山」という領域間を同じ人物が動き、境界を越境することで、むしろ周りからは接触領域が形成されているように見えるのである。RO 家自体が「町」と「山」の両方を内包しているし、RO を見ると結婚などで人が移動することによりアルパカ飼養者自身が接触領域を形成しうることがわかる。

「町」では、「科学的な知」をもたらす品質改良組織や技術者だけではなく、アルパカ飼養者同士の接触も重要であるとわかる。さらに、家畜取引においては、品質改良を進めたアルパカ飼養者が、組織に繁殖用生体個体を供給するという状況があった。ここでは、どちらが良質な家畜を持っているかという点では、組織と飼養者の関係が逆転している。

同時に、品質改良を行って経済的成功が可能になったからこそ、そのような人々は、日常的な家畜の世話は、比較的貧しい雇われ牧夫に任せ、自身はアルパケーロとしての自負を強めながらも、実際の家畜飼養からは離れていくという状況が見られた。その中で、従来「牧民」と呼ばれていた人々の間で、「アルパケーロ（アルパカ飼い）」と「パストール（牧夫）」が差異化され、アイデンティティの再編成が行われていく。しかし、Di・So 母娘という世代間で認識の差異が見られたように、視点によってはさらにずれが見られる。

接触はさまざまなレベルで起こりつつ、アンデス牧民社会は変容しているのである。

注

- 1) 本稿の内容は、2010年2月22日～4月23日、同年7月14日～10月13日、2011年10月18日～12月15日にかけてペルー共和国で行った現地調査に基づいている。使用した言語はスペイン語で、本文中に出てくる（ ）内の単語もスペイン語である。本文中の人名を表すアルファベットは、男の場合は大文字2つ、女の場合は大文字と小文字で表記した。

- 2) ただし、フローレス・オチョアはスリの毛の方がより柔らかで輝いており、高い市場価値を持

- っていると報告している。さらに、気温の低い、標高の高い高原により適しているという [Flores Ochoa 1986]。しかしながら、インフォーマントの So は、スリは幼いときには毛がワカヤよりも少ないため、寒さで死にやすいが、質としては同じだと話していた。また、筆者が観察した毛の売買では、スリとワカヤともに、白色、有色それぞれが同額で買い取られていた。
- 3) 2010年3月の聞き取りによる、おおよその頭数である。他に若干のリヤマとヒツジがいる。ヒツジはアルパカの群れと一緒に放牧されているが、リヤマは分けているという。これは、リヤマとアルパカは交配可能な上、毛の品質がアルパカより劣るリヤマとの仔は、品質改良のためには好まれないからである。
 - 4) 山崎は、500~2,000頭を中規模経営、2,000~3,000頭を企業経営としている [山崎 1992a:356]。また、真鍋は50~100頭を小生産者としている [真鍋 2009:32]。また、同じクスコ県で調査をした鳥塚は、一家族の平均所有頭数をリヤマ30頭、アルパカ65頭、ヒツジ45頭であり、一番多く家畜を所有していたものは3種の合計が862頭であったと報告している [鳥塚 2009:5]。筆者はピナイア村における家畜飼養頭数の全体的な調査を行えていないが、CV家も次節で紹介するRO家も、真鍋が貧困層とする小生産者よりは相当多くの家畜を所有していることがわかる。
 - 5) モンゴルにも類似した言い伝えがあり、交尾期の種オスとメス群を夜間に混同すれば夜間に出産するといわれる [小長谷 1991:58]。また、畜産学の分野から、アルパカの分娩は他の家畜と異なり夜間に起こることはなく、日が昇った後(7:00~13:00, 93.5%)に始まるとの報告がある [山崎 1992b:466-467]。日没後は急激に気温が低下するアンデス高地においては、新生子にとって午前中の分娩が生存の必要条件であるという。
 - 6) 2010年3月の聞き取りによる、おおよその頭数である。この他、ヒツジが70頭前後おり、アルパカと一緒に放牧されている。
 - 7) この頭数は、真鍋のいう小生産者 [真鍋 2009:32] に合致する。
 - 8) ③のオスは去勢オスではない。次章で述べるように、RO家は繁殖用(この場合は種オス)として家畜を売買することで大きな利益を上げており、去勢をしてしまうと商品にならないからである。Soは去勢をしないと語っていた。
 - 9) ワカヤのメスとスリのオスが交尾をした場合、スリが生まれてくるとROは話していた。
 - 10) このとき、技術者は村の他の人々にも品質改良について教えたが、全員がこのような新しいことに興味を持ったわけではなく、現在では改良の進捗度に差があるとROは語っていた。
 - 11) 毛の質を良くするには、家畜が安定して水分を含んだ牧草を食すことが必要であり、また改良には平均して8~10年もの歳月がかかるという [鳥塚 2010:98-99]。
 - 12) CV家のフェリア参加状況についてはまだ調査が進んでおらず、今後の課題としたい。
 - 13) ベルーの通貨はソル(sol)であり、複数形だとソレス(soles)になる。2010年、1米ドルが2.8ソレス程度であった。

参考文献

- 稲村哲也 1995 『リヤマとアルパカ——アンデスの先住民社会と牧畜文化』花伝社。
- 2007a 「常識をくつがえす中央アンデスの牧畜と狩猟」『地理』52(3):32-40。
- 2007b 「旧大陸の常識をくつがえすアンデス牧畜の特色」山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会, pp. 259-277。
- 稲村哲也・山本紀夫 2007 「アンデス社会の変容」山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会, pp. 557-578。
- 小長谷有紀 1991 『モンゴルの春——人類学スケッチ・ブック』河出書房新社。
- 田中雅一 2007 「コンタクト・ゾーンの文化人類学へ——『帝国のまなざし』を読む」『Contact Zone』1:31-43。
- 友枝啓泰 1986 『雄牛とコンドル——アンデス社会の儀礼と民話』岩波書店。
- 鳥塚あゆち 2009 「開かれゆくアンデス牧民社会——ペルー南部高地ワイリャワイリャ村を事例として」『文化人類学』74(1):1-25。

- 2010 「ペルー南部高地における牧畜民と市場との関わり——フェリアとアソシエーションにおける活動を通して」『人類学博物館紀要』28:95-116。
- 本江昭夫・藤倉雄司 2007 「アンデス高地でラクダ科動物が生き残った理由」山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会, pp. 311-334。
- 真鍋周三 2009 「ペルー・シエラ南部プーノ県の社会経済的变化の研究——南米ラクダ科家畜をめぐる諸問題を中心に」『人文論集』44(1, 2): 1-40。
- 山崎大輔 1992a 「南米アンデス高地のリヤマ, アルパカの飼育と繁殖(1)」『畜産の研究』46(3): 353-357。
- 1992b 「南米アンデス高地のリヤマ, アルパカの飼育と繁殖(2)」『畜産の研究』46(4): 465-470。
- 山本紀夫 1992 『インカの末裔たち』日本放送出版協会。
- 2007 「八〇〇〇キロメートルの大山脈——その多様な環境」山本紀夫編『アンデス高地』京都大学学術出版会, pp. 3-28。
- Concha Contreras, Juan de Dios 1975 Relación entre Pastores y Agricultores. *Allpanchis Phuturinga* 8: 67-101.
- Custred, Glynn 1977 Las Punas de los Andes Centrales. In J. A. Flores Ochoa ed. *Pastores de Puna*. Lima: Instituto de Estudios Peruanos, pp. 55-85.
- Flores Ochoa, Jorge A. 1986 The Classification and Naming of South American Camelids. In John V. Murra, Nathan Wachtel & Jacques Revel eds. *Anthropological History of Andean Politics*. Cambridge: Cambridge University Press, pp. 137-148.
- Pratt, Mary Louise 1992 *Imperial Eyes: Travel Writing and Transculturation*. London: Routledge.
- Sendón, Pablo F. 2009 Los ayllus de la porción oriental del departamento del Cusco. Aproximación comparativa desde el Collasuyu. *Bulletin de l'Institut Français d'Études Andines* 38(1): 107-130.